

手と手と手

岡山発 国際貢献

「私は四・四秒。でもアメリカ人の平均は九・七秒。日本人は四・三秒。恥ずかしいです」

今年二月中旬、高松市で開かれた国際協力セミナーで、講師のゲイブ・フィリップス・クレス(三)はうづむきながら話した。アフリカなどで国際協力活動を行うNPO法人・えひめグローバルネットワーク(松山市)のスタッフ。アメリカ人。四国在住歴四年。

参加者は、NGO(非政府組織)メンバーや教師のほか、記者を含めて二十人。それぞれ、自分の生活実態からほじきだされた数字を手に、苦笑するしかなかった。記者は四・八秒。七人は五秒を超えていた。エコシカル・フットプリントと呼ばれる。

人間が地球の自然を踏みつけた跡とでも表現するとイメ

不公平

ーシできるだろうか。人間が一年間に消費する食糧や木材などの資源量を、その生産に必要な陸と海を合わせた面積で表す指標で、一九九〇年代にカナダで開発された。輸入するモノザンビークの人は平均

持続不可能

ゲイブの話は続く。

「私たちNPOが支援する

〇・六秒。(地球の生物生産力一人あたり一・八秒

と比較すると)地球〇・三

個分の暮らしです」。会場

の空気が少し重くなった。

界の一人あたりの平均は二

未だ



竹内は、国際協力セミナーの参加者に「公平」という言葉の意味を問い掛けた＝2月、高松市

「日本人は地球二・四個分、

アメリカ人は地球五・四個

分」。ゲイブは淡々と説明

するが、記者の頭の中では

「不公平」という言葉が回

り始めた。

セミナーで紹介されたデ

ータは、欧州環境機関(E

EA)のホームページに掲

載されている最新版だ。世

界の一人あたりの平均は二

・二秒で、これは地球の生

物生産力を20%強超えてい

る。つまり、地球環境と人

間は、すでに持続不可能な

関係にあるという。

「問われているのは教育

の質」と、小栗有子(三)は

指摘する。日本では数少な

い持続可能な開発のための

教育(ESD)の専門家。

〇三年から鹿児島大助教授

を務める。

国際自然保護連合は〇二

年の報告書に「最も教育の

進んでいる国が：今日最も

深刻なエコシカル・フッ

トプリントを残している」

と記している。実際、就学

率などから測定する人間開

発指数(国連開発計画〇五

年報告書)は、アメリカが

世界十位、日本は十一位。

しかし、フットプリントは

いずれも地球環境の悪化に

強く加担している。

「これで先進国の教育は最

善を尽くしているといえるで

しょうかと小栗。「教育を問

い直し、方向転換することが

ESDの目指すところですよ」

人間理解

一つだけのみかんを二人の

子どもに手渡すと、たいてい

の子どもが半分こを試みる。

房の数で分けるか、重さで分

けるか、悩むという。

「本当の半分、本当の公平

って何でしょう」。ゲイブに

続き、講師に立ったえひめグ

ローバルネットワーク代表の

竹内よし子(四)は、参加者に

問い掛けた。

本当の公平を身に付け、国

際的視野に立ち、次世代のこ

とを考えながら行動できる人

間を育てること。竹内はES

Dをこう語る。そのためには

人間理解が欠かせないと。

「しっかりと話し合って、本

当におなかのすいている子に

みかんを譲ることが本当の公

平じゃないでしょうか」

求められる教育の転換